

日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

総会ご挨拶

ボストンからのご挨拶

増 潤 興 一

家内と訪日中にこの会に出席することが出来大変嬉しく思います。今回は横須賀の旧海軍工廠を訪問いたしました。丁度今から61年前(昭和19年11月)、学徒勤労動員と言って学生が授業を止めて働くようになったことはご存じの方はおられるかと思えます。

私はその当時東京帝国大学船舶工学科の学生で海軍工廠に派遣にされその溶接研究掛の所属になりました。それがもとで今日まで溶接に関する研究生活を送りました。

私がMITで卒業論文の指導をした学生には海軍将校が多数おります。旧海軍工廠は戦後米海軍の艦船修理廠となっており、私が指導した学生の一人が大佐に昇進して現在司令官(廠長)をしておりますので訪問した訳です。

ボストン日本人会の関係では日本語学校が開設されて丁度30年になります。私はその当時日本人会長をしておりましたので校長を兼務いたしました。当時日本電気(株)のボストングループの長をしておられた武田行松氏のご好意で同社の事務所で25名の児童で学校を始めましたが、建物の所有者から「児童の安全を保証出来ない」との苦情が出て立ち退かざるを得なくなりました。そこで一時MITの中で授業をしたのですが、今度は生徒の一人が迷子になるほど苦労をしました。

幸い通商産業省からタフツ大学に留学しておられた原田義昭氏がメドフォード高校で柔道を教えておられた関係で、この学校を使用させて貰うことになり、それが今日まで続いております。生徒数は4年後には約100名、8年後には約200名と言った具合に順調に増加し、現在は680名になっております。なお原田氏は現在衆議院議員として活躍しておられます。

もう一つ別のことについて皆様に申し上げたく思います。最近日本ボストン会で昔の留学生の活動をもっと調べようと言う作業を開始されていると伺いますが、これは非常に重要なことと思えます。特に

開戦前後に留学され戦時中、或いは戦後重要な貢献をされた方々のご業績がその当時の社会情勢の混乱で分からなくなって仕舞ったケースが多数あると思えます。

これらの方々のご活躍は日本と米国(特にボストン)とに亘りますので資料の発掘や保存などを出来れば日本側とアメリカ側とが協力して行ったら良いように思います。この問題に関して私がどれだけお役に立てられるか分かりませんが、出来るだけ努力して見たいと思えます。

これに関連して最近私の周りで起きた一つの出来事について述べてみます。阿部信泰元ボストン総領事のご在任中に奥様から「上條という名前の親戚が戦前MITの航空工学科を卒業して三菱重工に勤めていたことがあります」と伺いました。

私はその後名古屋にある三菱重工の航空関係の工場を訪問する機会がありましたが、仕事後の工場見学で戦時中使用されたゼロ式戦闘機などを陳列してある資料館に案内されました。

案内をして下さった人は上條氏のことはご存じありませんでしたが、偶々我々の会話を聞いていた人が「上條さんなら知っていますよ」と言われ、色々のことを伺いました。

戦後日本でYS11と言う飛行機を製造したことは多くの方々にご存じと思いますが、それを製造するために三菱重工は小牧にある名古屋飛行場に隣接して工場を作ったのですが、その初代工場長が上條氏だったとのこと。またその工場には上條氏が残された資料が今日も残っていることを知りました。

上條勉と言う方が1931から32年にかけてMITの航空工学科に在籍しておられたと言う記録はありますが、その方がYS11の製造に貢献されたことは三菱重工を訪問するまで知りませんでした。

このような資料を何かの形で組織的に発掘、且つ保存するシステムがあればやがて可成り立派な資料が蓄積されるように思います。

(ボストン在住、MIT名誉教授)

油彩・水彩を描く会

西川 文夫

11月27日午後1時、JR「駒込」駅より本郷通りを都心に向かって約7分歩いた六義園管理事務所前的大门に酒井夫人、當間夫人、藤盛夫人、西川が参集。水彩、パステル、水性色鉛筆によるスケッチを楽しみました。

都心にあることを忘れさせる、鬱蒼たる木々に囲まれ、豊かな緑のコントラストに映える紅葉は一段と美しく、それぞれの技でしばし自己満足の時を過ごしました。

夜の飲み会で、酔いのまわった頃を見計らって作品を披露したところ、お褒めの言葉をいただきました。

次回は桜の咲く頃になりますが、奮ってご参加ください。幹事：西川文夫、藤盛富美子。



油彩・水彩を描く会

紅葉狩りの会

藤盛紀明

11月27日(日)駒込六義園で開催された「紅葉狩り」は晴天に恵まれ、16名の参加を得て賑やかに行われました。

管理事務所前に参加者が集まった午後4時には、そろそろ日暮れが始まっていましたが、少し早めにいらした方は、日光に映えた美しい紅葉を堪能されました。午後5時半、ライトアップで浮かび上がった六義園の紅葉はさらにあでやかで、京都のライトアップよりも美しいと感じました。

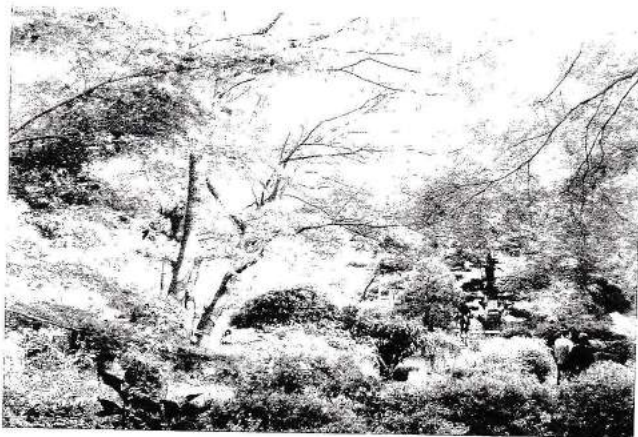
会食の温野菜シャブシャブも美味で、大変盛り上がりました。

来年は東京の郊外に出ようのご意見が出され、場所は写真家の篠崎さんからアドバイスをいただくことになりました。是非ご参加ください。

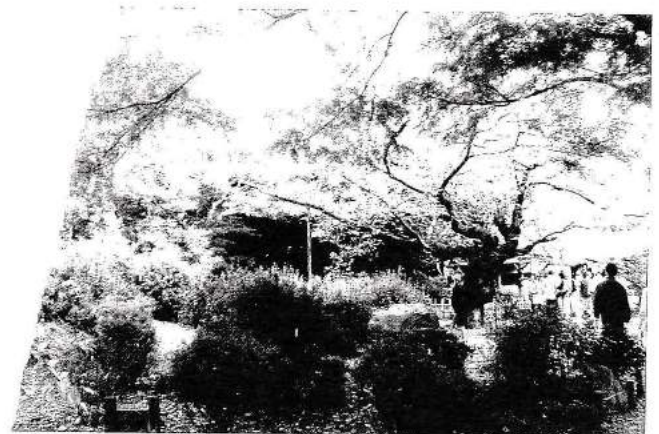
幹事：藤盛紀明、富美子



紅葉狩りの会



六義園



六義園

日本ボストン会観桜会

2006年のお花見は、3年ぶりに千鳥が淵において開催いたします。ボストンからの「里帰り」のご一行を交えて、4月1日(土)に開催します。

下記の要領にて開催いたしますので、奮ってご参加願います。準備の都合がありますので、申込み締切りを3月26日にさせていただきます。

集合場所： 旧フェアモントホテル(現三井アーバンマンション)前、ボート乗り場付近(地下鉄「九段下」駅下車、2番出口から徒歩10分)。

集合時間： 4月1日(土)午後5時30分(幹事は5時50分まで待ちます)。

散策ルート： 千鳥が淵⇒靖国神社⇒武道館前。(散策約1時間)。

宴会場： 九段会館(午後6時半から)
千代田区九段南1-6-5
☎03-3261-5521

費用(予定)：6000円
会費は事前納入を原則とします。

費用振込先：

申込先： 生田英機

桜景色をスケッチする会 開催案内

「油彩・水彩を描く会」(別項参照)が「観桜会」の開催日に、水彩・鉛筆など手軽な画材でスケッチする催しを企画しました。同好の方は午後1時に旧フェアモントホテル前へお集まり下さい。なおご参加希望の方は幹事宛にご一報下さい。

幹事： 西川文夫

藤盛富美子

ボストン日本人学生会の 記録集への調査協力依頼

三好彰

昨年の総会でMITの増淵興一先生が同校に戦前留学した上條勉氏に言及された。帰宅後にボストン日本人学生会の記録集を調べたら、上條氏が出ていた。その記事は昭和9年1月5日に開かれた新年会の出席者の名簿であり、これが戦前の最後の記事である。

この新年会の出席者は20名であり、その中に先日世界された経済学者の都留重人氏もおられる。そのほかに外交官、医学者さらに実業界で大成された方もお見受けする。また、ハワイの日系二世女性が3人いるのも目を引く。

しかし大半の方の留学先や帰国後の仕事が把握できないでいる。実は上條氏の日本での仕事もつかめなかったのだが、増淵先生のお話から分かったのは幸運だった。

ところでボストン日本人学生会の記録は戦時中に行方不明になっていた。戦争が始まって日本人は捕虜交換船で帰国するように命じられたが、本の類の持ち出しが厳しく制限されたためである。ところが終戦直後に留学された藤代素子さんがケンブリッジに残っていた亡父の真次氏の遺品の中から、この記録を見つけ出された。真次氏も上記の新年会の出席者の一人である。なお、この記録集をご覧になられた井口前会長は同じ交換船に乗られたようだ。

デトロイト郊外に住んでおられた素子さんと連絡が取られて、貴重な写真を送っていただいた。ライシャワー博士、博士の日本学の先生であるエリセフ教授、それに若き日の都留先生も写っている。

総会で小林規威先生が図らずもボストン日本人学生会について話された。そして先生の留学時代のお仲間について教えていただいた。特に結婚で改姓されたために追跡できないでいた女性のことがわかってよかった。

さて全4冊からなるボストン日本人学生会の記録には600人余の日本人(日系人を含む)と約200人の外国人が出ているのだが、日本人の約半数と外国人の約7割の方々については、何らの情報も得られていない。

これまでに調査してきたことを当会のホームページに載せるのが時代に合った広報であり、今後の調査活動の一助だと考える。会員各位のご意見をお聞かせください。

ボストン今昔物語

ボストン日本人会編集部

日本ボストン会の皆様、お元気にお暮らしのこと
と思います。また貴会の活発なる活動と興隆に対し
お慶び申し上げます。

さて表題の寄稿依頼に対し、昔を何時にすべきか
迷いましたが、皆様方の多くがボストンに滞在され
た1980年代中頃から90年代初めを昔とし、そ
の後ボストンがどのように変わったかをお伝えした
く思います。

(冷戦終結まで)

皆様おなじみのボストンを一周する環状ハイウエ
ー、ルート128は1951年に開通しました(当
初は27マイル)。その後この地域はベトナム戦争
後の後遺症としての落ち込みがありました。アメリ
カのハイテク、エレクトロニクス産業の中心とし
て発展。1980年にはアメリカのコンピュータ産
業の売上の34%(\$260億ドル)を占め、その
メッカとして揺るぎない地位を築いたかに見えま
した。

時を同じくして、石油ショックを乗り越え逞しく
発展する日本経済を背景に、数多くの日本企業がボ
ストン地区に進出、また多くの日本の方が研究に、
勉学にMIT、ハーバードを中心とする大学、研究
施設に集まったのもこの頃です。

しかしながら、80年代に入りパーソナルコンピ
ュータ時代を迎えると、半導体産業を中心に発展し
ていた西海岸のシリコンバレーに徐々に後塵を配す
ようになり、80年代の終わりには、その地位を
シリコンバレーに譲り渡すことになりました。

また、冷戦の集結(ソ連の崩壊)を受け、ボスト
ンの産業のもう一つの雄である、軍需、宇宙開発産
業もその成長を止めたのも90年代に入ってからで
す。

もてはやされた「マサチューセッツの奇跡」は終
わりを迎え、経済アナリスト達から、ボストンはこ
のまま行けばデトロイト、ピッツバーグのように、
長い衰退の道をたどるだろうと言われました。19
92年の頃です。

(グローバリゼーションの始まり)

それから10数年の歳月が経ち、ボストンは大き
く変わろうとしています。それも21世紀の新しい
技術: バイオテクノロジー、新素材、ナノテクノロ

ジーの研究開発の事業化の担い手としてのボストン
です。

新技術に挑戦するベンチャー企業、研究施設がM
ITに隣接したケンドールスクエアを中心に集ま
り、テクノロジースクエアの復活に期待されてい
ます。

ダウンタウンの旧金融街も、その研究や新ビジネ
スを支えるべく投資金融銀行やベンチャーキャピ
タルが集結、新しい高層ビルが立ち並ぶようになり
ました。ボストン港、ピア4から見るビル夜景はより
素晴らしいものとなりました。

(コミュニティの変化)

ローガン空港が変わりました。ウィリアムズトン
ネルが開通しマスバイク(Int90)と直結、カラハン
トンネルの渋滞が解消されました。空港自体も高架
道路となり、その中心にヒルトンホテルが移り、A
ターミナル、Eターミナルも新装されました。

ダウンタウンを高架で横切っていたInt93がすべ
て地下に潜り、イタリアンレストランが並ぶEボス
トンとの行き来が容易になりました。

そしてダウンタウン周辺(North Point, South
Boston)は再開発真っ盛りです。まだ更地(工
事中)が多いのですが、新技術による新ビジネスの興
隆を想定し、数年後には近代ビジネスビル、商業施
設、そして住居用ビルと公園が最適配置されたモダ
ンな町に生まれ変わろうとしております。

まだルート128沿線や郊外まで広がりは見せて
おりませんが、復活に向けてボストンが歩み始めて
いることに頼もしい思いをしております。

皆様のご子弟の多くが通われた日本語学校(補習
校)は健在、まだメッドフォード高校にあります。
当時(80年代後半)の生徒数は350名、その数
は当地の日本企業数の増減と相関しておりました。
その後日本企業は減り続けましたが、驚くなかれ生
徒数は逆に増え続け現在は680名、ほぼ倍です。

この現象は、ボストンにおける日本人コミュニ
ティの構造変化の現れと捉えております。国際結婚や
自らの意思でボストンに住む日本人の方々が多くな
ったためと思われ、日本人のグローバル化が進んだ
証拠と前向きに考えています。

ボストン(及びMA州)はアメリカの有史以来、
絶えず最先端技術の先頭に立ち、そこから起きた産
業を全米に拡げるパイオニアの役目を果たしてきま
した。21世紀を迎え、新たな挑戦に向かうボスト
ンを暖かく見守り、そして応援して行きたく願って
おります。では!

1950年代初期の ケンブリッジ 小林規威

私が初めてボストンのローガン空港に降り立ったのは、1951年9月中旬初秋の日の午後であった。

日本から船でサンフランシスコに渡り、そこから飛行機に乗り継いでようやくこの古い伝統豊かな学都に着いたのである。弱冠18歳で敗戦国日本から来た私には、空港からタクシーに乗る知恵も金もなかった。重い荷物を抱え地下鉄に乗りケンブリッジに向かった。

目的地ハーバードについては、かねて広大で壮大なキャンパスを予想していた。しかし夕闇迫る中、ケンブリッジ駅の階段を登ると驚いた。そこにあったのは、古い街並みと、鉄柵に囲まれたハーバード・ヤードに立ち並ぶ赤煉瓦の寮や教室に建物だけだったからである。

その晩は、指定されていた寮も準備が整っておらず、街中のダッドレー・ハウスのダブルデッカー・ベッドで眠った。いささか心細かった。

しかし、数日して、住居も定まり(レベレット・ハウス)、ハーバード・カレッジのクラスに出てみると、そこには、全く私の想像を越えた、輝かしく新しい世界が広がっていた。

私は、ガバメント・デパートメントの3年生に編入されたのだが、まず驚いたのは、教授陣の素晴らしさ、学友の優秀さであった。教授陣の中には、後日ケネディー大統領を支えたマクジョージ・バンデューやエドウィン・ライシャワー、そしてシュレンジャー Sr. 教授達がいた。卒論の厳しいチューターは、かのヘンリー・キッセンジャー氏だった。彼らの講義は極めて啓発的で、内容も濃く、その後の私の理念やものの考え方の支柱となった。

学友を見渡すと、そこには世の中にこんな頭のよい人がいたのかと驚く程の秀才が溢れていた。同級に久保正彰(後に東大名誉教授)、そして一年下に榎原稔(元三菱商事会長)が在学していた。彼らはいずれも成蹊高校から、セント・ポールに派遣され、そこで研鑽を積んだ上でハーバードに進学してきた英才である。彼らの勉強ぶりを見て、私は大いに啓発された。

ボストン地域の大学や大学院に在籍していた日本人を見ても、そこに百花繚乱の趣があった。その方々の中で、私が留学中ご厚誼にあずかったり、長くご鞭撻をいただいた先輩や友人には次のような方々が含まれている。(以下敬称略)

○ハーバード・ビジネス・スクール：浅野開作、ハ

ーバード大学院：齊藤真、嘉治元郎・佐代、田中英夫(以上東大)。牛場大蔵、福岡正夫(慶応大)。林容吉(早稲田大)。石坂一義(日銀)。星島光平、芦原義信(以上建築家)。岡孝(ジャーナリスト)。

○フレッチャースクール：加陽治憲、千葉一夫、北村汎(以上外務省)。緒方四十郎(日銀)。

○MIT：鮎川弥一、小松隆次(三井物産)。

○ウェルズレー：石橋(石井)多摩子、岡本(千葉)恵子。

○その他女性：石崎(島崎)陽子、塩原(原)邦子、大橋保子、川島(林)由美子など、こちらも多士済々であった。

皆んな必死に勉強し、戦勝国米国の文化や文明を吸収しようと努力した。まことに勉強しがいがあるし、私にとり最上の留学生活であった。

英語での勉強に追いかけている間、一つの息抜きは、年何回かフィリップス、ブルックス・ハウスで開催されたグレーター・ボストンに住む日本人の学生会の集まりであった。

ここで、ライシャワー先生のお話を聞き、またエリセフ教授の訶咳に接することが出来た。とりわけエリセフ先生の明治調のパーフェクトな日本語と文章には強い感銘を受けたことを覚えている。この会の出席者はいずれも、平和条約締結後の日本再興への意欲に燃えていた。

そもそも外国に来たら、出来るだけ日本人に会わず、米国人と交わろうというのが、留学当初の私の考え方であった。しかし、年何回かの日本人学生会の集まりは、東京へのホームシックを忘れさせ、有意義な日本人留学生間の交流を深める重要な役割りを担っていたことも亦正しかった。

以来私は何度かハーバードで学んだ。しかし50年代初期のケンブリッジにおける体験は、一番強く印象に残っている。さらに私は、この時代におけるハーバードの教育やそこで培われた友情が、これまで生涯を通じて大変有益・有用であったことを自覚し、心から感謝している。

(補遺)ボストン時代の忘れがたい思い出に、黒船艦長ペリー提督のお孫さんの奥方のご葬儀に出席し、ポール・ベアラーの役割りを担ったことがある。ペリーさんご一家は、クエーカーの信者であり、戦後パイニング夫人を助けて日本で活躍しておられた。その頃、私は津田塾大学で開かれた留学生研修会に参加してお世話になって以来、親身のお付き合いをしていた。帰国後ナハントにお住まいだった。ご葬儀に出席し、ロングフェロー・パークの教会で大役を承ったとき、これで日米友好交流の歴史の一駒に参加できたと考え、大変感慨深く思ったことを覚えている。(慶応義塾大学名誉教授)

いわゆる歴史認識問題について

顧問 茂木 賢三郎

1. 戦後60年目を迎えて

2005年は第2次大戦の終戦（正確には「戦闘停止」、国際法上は講和条約締結のときが戦争終結）から60年という節目の年であったが、春以来小泉首相の靖国参拝に関して中国や韓国から猛烈な日本非難が浴びせられた。国内でもこの問題に関する論議が高まっている。

日本軍に関するさまざまな事例は、日本国内で発生したものではない。いろいろな理由はあるにせよ、日本軍が中国大陸や朝鮮半島に展開して起きたことで、甚大な被害をこうむり悲惨な運命に陥った多くの人がいることは事実だ。もちろん、人類史の中でこうした被害を発生させたのは日本だけではなく、より悲惨な多くの事例があるが、日本としても当事国の被害者感情は重く受け止めなければならない。

だが、その一方でこの問題は日本に重大な課題を投げかけているように思う。それは、一般の国民はもとより国会議員や官僚、世論形勢に大きな影響力を持つジャーナリストや有識者と呼ばれる人々の多くが、戦前戦後の歴史から今日に至るまでの経過をよく知らないのみならず、過度の自虐意識や罪悪感を持っていることである。

2. 歴史理解の偏向を正す

こういう事態になった原因には、授業時間の関係かそれともトラブルを避けるためか、歴史教育から近現代史の部分が欠落していること、サンフランシスコ平和条約締結に至るまでの間、占領軍により強力に展開された広報活動である「戦争犯罪周知計画」と徹底した報道管制・検閲による精神的ダメージ、そしてこれに勢いを得た進歩的文化人や教条的なマスコミ・ジャーナリストによる思想的活動の影響などがあるろう。

私はかねがねこういう風潮に疑問を持っていたが、まず自分自身が勉強しなければと思い、手始めに東京裁判とサンフランシスコ平和条約の関連からインターネットで調べて見ると、いままで知らなかった実に多くの事実が確認できた。もっばら言われている「日本は平和条約で東京裁判を受け入れることを

世界に公約した。したがってそれにより処刑されたA級戦犯が合祀されている靖国神社に首相が参拝するのは遺憾である」という主張は、全くの誤りであることがわかった。

この条項は「裁判」ではなくて「判決」を受け入れたもので、その意味は講和発効に伴う国際的な慣行であるアムネスティーを適用して戦犯を釈放することを認めない、ということである。条文の後段にそのことが明記されていることから、この解釈が正しいと考えて間違いあるまい。

この後、国権の最高機関である国会で、昭和27年から30年まで4度にわたって戦犯全員赦免を関係当事国に要請する決議案が採択され、最終的に昭和33年までに戦犯全員が自由の身となる。そして極めて重要なことだが、刑死者については外務省議で公務死とすることが決定されたとのことが国会の委員会質疑で言明されている。決議案の趣旨説明には東京裁判がいかに不当なものであったかが堂々と述べられており、ほとんどの決議案が全会一致で採決されているのであるから、日本が東京裁判を全面的に受け入れたなどという主張が事実と反するのはこの点からも明白だ。

そもそも東京裁判には幾多の重大な問題点があったが、占領軍の支配のもとでは多数派の判事の意見が採択されて刑の執行がなされることに抵抗する術はなかった。だが、国会決議等の努力によって戦犯の赦免・釈放が実現して、A級戦犯の賀屋氏や重光氏が復権を果たして国会議員や閣僚になり、重光氏は勲一等の叙勲に輝いたことを多くの人が知っている。

ではなぜ処刑された人々だけがいつまでも罪人扱いされねばならないのか。もちろん失われた命は蘇りようもないが、罪に関しては獄から開放された人々と同様に赦免されたと考えなければ筋が通るまい。さらにもし赦免扱いにできなくても、命をもって罪を償った人々をいつまでも罪人扱いにすることは正しいのだろうか。民主主義に基づく法治国家日本において、もし刑期を終えて出所した人を前科者扱いにしたら、人権侵害問題として大騒ぎになるだろう。

(つづく...)

いわゆる歴史認識問題について (つづき)

さらに驚くべきことは、ヒットラーと東條元首相を同列に論ずるような人々の存在である。中国の高官の中には「ヒットラーの墓をドイツ人がお参りしたら、ヨーロッパでは大騒ぎになるだろう」と言う人がいる。中国人ならまだしも、日本の有力な政治家の中にさえ「ドイツは十分謝ったが日本は謝り足りない」などと、ナチスと日本軍の行為を同じであるかのような言い方をする人がいる。日本軍でも第一線の部隊に戦争法規違反などのケースは遺憾ながらあったが、ナチス・ドイツが国策として罪なき多数の人々を貨車でゲッターへ送りこみガス室で殺したことは、全く次元が違う。

3. ポツダム宣言受諾は条件付降伏であった

一番象徴的な誤認の例は、日本がポツダム宣言を受諾して無条件降伏をしたという理解ではないか。私は何年前かに、ソ連による日本将兵のシベリア抑留はポツダム宣言の条件に違反した行為だと聞き、その時は実はここまで思い至らなかったのだが、今回改めて宣言の全文をネット検索で読み、全13項目のうち8項目が降伏の条件であることを知って自らの不勉強を反省している次第である。

しかも連合国側はいくつかの条件に重大な違反を犯している。この後いろいろな機会に多くの人々に問いかけてみると、なんと驚いたことに国会議員や経済界の人々を含めて、条件付降伏だったことを知る人は皆無ではないが極めて少数でしかない。

マッカーサー元帥が、解任されて帰国した後にアメリカの上院で証言し、その中で日本の戦争は主として自衛目的だったと述べたことはかなり知られているが、今回あらためてネットで検索し確認した。

4. 靖国問題に関する誤解

政経分離についても、まず憲法の条文を改めて確認し、これをどう解釈すべきかについて調べてみたが、首相の靖国参拝についてだけ何故か殊更に取り上げられている嫌いがあることがわかった。各地で行われている地鎮祭や落成式に公的な人々が参列することは当たり前で、現に最高裁の判決でも違憲ではないとの判断が示されているし、お正月に首相が伊勢神宮詣でをすることはほとんど問題になっていないではないか。

天皇陛下の参拝中止も、A級戦犯合祀が原因であると巷間言われている。しかし、Voice 12月号で岡崎久彦氏が書いているところによると、陛下が靖国にいらっしゃらなくなったのは、三木内閣のときの公人・私人問題が原因であって、合祀はその3年後のことだという。そして天皇家からは依然として春秋の例大祭に勅使が派遣され続けている。私も早速ネットでこの時期のずれを確認した。

ただし、靖国神社境内にある遊就館の展示やビデオのナレーションの内容については再検討されるべきものがあると考えている。

5. 事実に基づく正しい理解を

こうした一連のネットによる調査の過程で、佐藤和男青山学院大学名誉教授編の「世界がさばく東京裁判」という本を知り、早速購入して読んでさらに多くのことを知ることになった。今回の私の調査はネット検索を主としたいわば手軽で安直な俄か勉強でしかないが、それでも平均的な日本人の理解レベルと比べたら随分と多くの事柄を認識することになったように思う。

ポツダム宣言の例に端的に示されているように、多くの人々がほとんど何も正確に知らないままに、外国からの非難や偏ったイデオロギーの主張に影響され、誤った認識に基づく世論形成が行われつつある。日本はいま、そういう危機的な状態ではないか。このままでは日本の誇り、アイデンティティーは崩壊し、教育・人造りにも悪影響がおよぶことは避けられまい。

反省すべき点、謝罪すべき点は当然そうすべきである。しかし、その一方で、民主主義を旨とする独立国である日本が、国会審議などの正規な手続きを経て決定したことを、外国からの圧力をかわそうとして安易に変更するようなことはすべきであるまい。日本の誇りやアイデンティティーを守るために、我々は最大限の努力を払うべきではないだろうか。それにはまず正確に、かつ深く歴史的事実や事態の推移を知ることが肝要であろう。

歴史を飲もう会

日本人学生会(その2)

下町散策と忘年会

三好彰

平成17年12月11日(日)午後1時半集合、曇

岩崎弥太郎と言えば三菱財閥の創始者だが、彼とその子孫は近代日本の文化遺産の形成に貢献している。代表例が都内江東区に現存する「清澄庭園」である。今回の散策はこの庭園が振り出しである。

この庭園は、明治初期、財界の大立者にのし上がった弥太郎が予て抱く夢を実現した回遊式林泉庭園だが、一般的には立地条件と水運の便を利し、日本各地から集めた名石が多いことで知られている。

傘下へ海運事業を持つ弥太郎にして出来ることであつた。何の変哲もないように見える石も、幾つか組み合わせると石組みとして配置されると、作庭者の意図を表現するようになり、そのような眼で見ると、なかなか興味深いものである。石組は造園技術の一つの基本であり、この庭園は愛好者にとって恰好の学習場所を提供して呉れている。

「清澄庭園」から両国方面にかけての一带には多くの歴史的スポットが存在している。小名木川を越えて、通りからほんの少し入った路傍に、人知れず「芭蕉稲荷」がある。奥の細道に出かけるまでの住居跡と言われている。近くには立派な「松尾芭蕉記念館」もある。

両国駅付近には葛飾北斎に因む「北斎通り」があり、その先を曲がると、「江川太郎左衛門の住居跡記念碑」に突き当たる。記念碑には何の記述もないが、ジョン万次郎が一時江川邸に寄寓していたと伝えられる。

現在、この地帯は、大小のビルや倉庫で一杯で、人気も少ない、潤い欠ける場所のように見えるが、往時は多くの市民が好んで住む、四季折々生活を楽しむことの出来る都市の下町であつたに違いない。

予定していた両国国技館内の「相撲博物館」は、他のイベントのため見学出来なかったが、両国駅西口から近い「回向院」や「吉良上野介の屋敷跡」などを覗き、午後4時半には忘年会会場の「ちゃんこ大内」に辿り着く。年の瀬の市の賑わいを背に、一同鍋を囲んで乾杯。参加者15名。

(篠崎史朗記)

小林規威先生からの貴重な思い出話しのご寄稿を拝見しましたので、取り急ぎ手元の記録集と比べてみました。(別項参照)

1. 名前の出てこない人:

嘉治元郎、葦原義信、緒方四十郎(3人)

記録集の記事は会合への出席者名簿であることが多いので、欠席すれば出てこない。

2. 調べた範囲で鬼籍に入っておられる方々:

浅野開作、田中英夫、牛場大蔵、林容吉、千葉一夫、鮎川弥一(6人)

3. エリセフ先生の講演会に、ノーベル賞を受賞された小柴先生(留学先はロチェスター大学)が出ておられます。

これまで調べたことを随筆風を書いて、当会のホーム・ページに載せるのが簡単な広報であり、それが調査の引き金になるのではないかと思うようになりました。皆様方のご意見をお聞かせ願います。



清澄庭園



松尾芭蕉記念館入口前

美術の会 雪景色

Claude Monet (1840~1926)

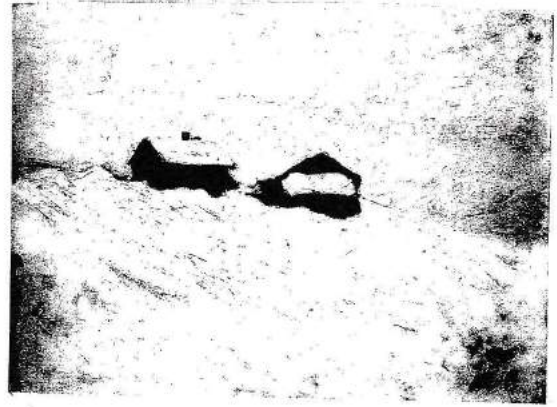
酒井典子

パリから北西セーヌ川沿いの小さな村Argenteuilに1871年の終りから1878年にかけてMonetは住んでいた。そこで彼は冬の雪景色を多く描いている。

“ボストンに愛された印象派展” (名古屋ボストン美術館-2003年4月26日~11月19日)で展示された① Snow at Argenteuil (1874)はMonetが住んでいた近くの景色である。

遠近法によって描かれた小さな道、左前方の木々から後景の村の家、そして教会へと見る人の目を導いている。右前景のまだら模様を描かれた雪の表現は浮世絵に見られる雪の様でもある。まだ雪が降っている、淡い光の差す冬の日の静けさが伝わってくる様である。

安田火災東郷美術館で開催されたRaw Collection (チューリッヒ、スイス)展、1999年(10/29~12/6)、で展示されたMonetの雪景色を思い出す。② House in the Snow in Norway (1895)はカラフルな雪の表現とは対照的であった。



② House in the Snow in Norway (1895)

1895年、Monetは長男の住むNorwayへ行き、スカンディナビアの雪に覆われた景色に大喜びしている。白い雪の中の2軒の家、画家は零下25度の戸外で描いたと言われている。

ほんのりピンクがかかった冬の空、柯度も色を塗り重ねて分厚くなった雪、モノクロームに近い色調によって、あたり一面にただよう深い静けさが伝わってくる様である。Monetの手にかかると平凡な風景も詩情あふれる場面となるから本当に不思議である。

国立西洋美術館常設展で、Monetの描くもう一つのSnow at Argenteuil (1875)をいつでも鑑賞できるのは嬉しい限りである。(Feb. 23, 2006 記)



① Snow at Argenteuil (1874)

秋の美術の会： 国立西洋美術館、開催日 06年10月14日午後3時 国立西洋美術館〈地獄門〉付近集合

日本最大の クルーズ客船が就航

久米生光

《飛鳥(おか)II の紹介》

郵船クルーズ(株)が旧飛鳥に代わる飛鳥IIを06年3月から運航する。総トン数5万トンは日本籍船として最大。全長241メートル、船客供用層8デッキ、客室数426室(全室海側)、船客数720名、乗務員数約400名。

本船は元クリスタル・ハーモニー、日本郵船(株)の海外子会社が運航していた船を今回約100億円かけて、日本人船客の好みに合わせて大改装した。

4月上旬には100日間余りの世界一周クルーズへ出航する。旧飛鳥以来、世界クルーズはとても人気が高く、2年先までキャンセル待ちとか言われている。

本船は7月中旬日本に帰った後、1泊~10泊程の日本周辺クルーズを予定、小生は8月3日(木)~8月9日(水)横浜発着、船中6泊の「竿燈・おぶた祭りクルーズ」に申し込んでいます。

《楽しみ方は十人十色》

クルーズはゆっくり、スローな旅の典型。空路1時間の旅程が船では一日かかる。例えば日本-ホノルル間が飛行機で7時間なら船は一週間の旅。船は旅の移動の手段と目的を合わせて提供してくれる。

クルーズ中、船客はグルメ、ファッション、エステ、各種ステージに映画、文化教室と何でも出来れば、反対に何もなくてもよい自由人となれる。

クルーズの魅力はとても幅が広く、人さまざま。早朝起床し、大海原を眺めつつジョギングで汗をかく。後の生オレンジジュースがたまらなく旨いから、テレビと新聞、電話のない暮らしが新鮮、専門書がこんなにすっきり読めたのは久しぶり、3日間一度も陸地を見なかったのに感激した等々。

米国人を主とした世界クルーズファンに高評だった船が生まれ変わってのデビュー、皆様も非日常空間に身を置かれ楽しみの宝探しのお試しを。

二伸 この件、またクルーズ全般(国内・海外コース、日本船・外国船を問わず)に互りお問い合わせ、お便り下されば幸甚です。

連絡先:

ゴルフ懇親会のご案内

本年第1回懇親ゴルフ会は次の通り開催します。

日時: 2006年4月20日(木)
場所: サンメンバーズCC
電話: 0554-66-2314
集合: 現地 午前9時
スタート第1組目午前9時32分
参加者: 4組16人を募集
費用: プレー費12,880円(乗用カート使用)
参加費 5,000円
申込締切: 3月31日
申込先: 山崎 恒
交通(車): 中央高速道路。(IC出口:上野原)
(電車): 中央線四方津駅発8:45のクラブバス
利用で間に合います。

優勝の感想

山崎規矩子

帰国して5年、アメリカで鍛えたゴルフがこのボストン会では成果が出ず、地団駄を踏んでいましたが、やっとベスト・グロス優勝という形で報われました。

美しいが難しい藤が谷ゴルフコースとの相性が良かったのか、佐々木会長、近藤氏、吉田氏というプレーイング・パートナーズが良かったのか、いつもなら4時半起き、5時半出発、ゴルフ場7時到着というルーティーンが、今回は息子の家に泊まり、電車でゴルフ場という選択が良かったのか、分かりませんが、何はともあれ、一つの実績ができました。

同日夕に行われた日本ボストン会総会で、ボストンでゴルフをご一緒させて戴いた増淵先生ご夫妻に祝福していただき、本当に光栄な一日でした。

ミッシェル・ウィ、藍チャン、さくらちゃんと若者ばかりの活躍がもてはやされていますが、私達オールド・ガールズも負けずに頑張ろうじゃありませんか!

第22回ゴルフ懇親会

11月11日、藤が谷カントリークラブにて開催されたコンペの結果は次の通りでした。

優勝 山崎規矩子 グロス 97 HDCP 26 ネット 71
2位 酒井一郎 " 114 " 36 " 78
3位 磯崎一郎 " 110 " 31 " 79

幹事会記録

日時: 2006年1月19日(木) 午後6時半~9時

場所: NEC三田ハウス芝クラブ

出席者: 16人

*佐々木会長: 次期会長、次々期会長を選考中。

*事務局報告:

新会員: 相山豊氏、長島雅則氏、笠原慶昌氏、
ジャメンツ登美子氏(4人)。

*会計: 総会は36名出席、35,772円剰余金。

*ゴルフの会:

幹事は山崎恒氏に、近藤宣之氏には補佐を依頼。

前回(11月11日)優勝者: 山崎規矩子氏。

次回: 4月20日(木) サンメンバーズCC。

次々回: 10~11月(予定)。

*お花見の会: 「いこいの場」メンバーの里帰り旅行が計画されている。4月1日(土)千鳥が淵。懇親会会場は九段会館。

*油彩・水彩を描く会: お花見の会にあわす。

昨年11月27日(日)六義園にて実施。

*クルーズの会: 飛鳥II(旧クリスル・ハービー)が今年から日本を中心とするクルーズに就航する。

*歌う会: 休会中。会場が見つければ再開。

*ハイキングの会: 5~6月で計画中。

*美術の会: 10~11月、国立西洋美術館。

*音楽の会: Boston Pops海外公演の予定未定。

もし来日がなければ、小ホールコンサートを企画する。

*紅葉狩りの会: 11月~12月(未定)。場所は検討中、多摩、鎌倉、京都?

*ボストン・ガイドブック: 2ケース発注を予定。

*ホーム・ページ: 現在の容量が限界に達しているので、対策を検討中。

*歴史を飲もう会: 12月11日(日)下町探訪、次回は未定。

*「ボストン日本人学生会」調査経過報告を受け、今後の調査方法は幹事の提案を待つことにした。

*関係団体: 佐々木会長4月21~22日MIT訪問予定

*ボストン日本人会婦人部: 第3回「里帰り旅行」の3月来日を計画中。

*2006年総会: 今年の総会を11月第3金曜日17日(金)開催に変更。

*会報発行: 3月10日、(追記: 秋の会報原稿は8月末原稿締切り、10月初め発行を予定)。

*その他: 若い世代にどのように「ボストン会」を伝えて行くか、意見を交換した。

*次回幹事会: 06年6月9日開催。

総会(2005.11.11)補遺

*増淵興一先生: 私は今回の旅行で、九州大学のビジネススクールで講義をしましたが、その内容は米国での訴訟に関するものでした。溶接では非常に高熱で材料の一部を溶かして接合しますので熱により部材が変質し、内部歪みを生じ、変形を起こしますが、こうした現象の解析が私の専門であります。溶接で作った構造物は溶接箇所から壊れることが良くあります。

日本ではこのような問題が起きた場合は官庁主導の調査委員会などで審議されることが多いですが、米国などでは裁判で処理されることが多くあります。その場合原告および被告に弁護人が付き、技術専門家が技術的な問題をサポートする訳です。

皆様ご承知のように戦後日本から非常に多くの構造物が諸外国に輸出されました。勿論その大部分はうまく運転されておりますが、問題が起きたものも無い訳ではありません。その様な場合日本人技術専門家がいたら非常にたすかりますが、実は私にはその様な仕事が可成りありました。

将来を考えますと輸出した構造物の総数はどんどん多くなり、また古くなりますから問題を起こす物が増加して参りますので、どう対処したら良いかが重要な問題になります。この様な問題について講義して参りました。

*増淵夫人: 現在はボストン日本人会副会長の一人として高橋会長の補佐をしています。婦人部の役員も兼ねていますが、古川義子さんが現在は部長をしておられます。

*吉野耕一顧問: ポーツマス条約締結100年を記念して、NH日本協会が7月から9月の間、盛り沢山な記念行事を行いました。日本人会は参加しませんでしたので、個人で旧制松山高校の同級生に声をかけ、5組10名が参加しました。10年前日本ボストン会の方々が来られた時廃屋同然だった両全権団の宿舎Wentworth By The Sea Hotelも立派に改修され、一同宿泊と晚餐に昔を偲びました。

*吉野夫人: 第3回の里帰りの旅の参加者は最終的に5人になりました。何人もの方々が高齢による諸病状のために長旅が不可能と診断され、今回の参加を断念されました。誠に残念ですが、ボストンから成田は高齢者にとって想像以上に長過ぎる飛行のようです。5人は一週間東京に滞在して、日本ボストン会のお花見にも参加させていただき旧知の方々とも親交を温めたいと楽しみにしております。

日本ボストン会2005年度総会報告

日時2005年11月11日(金)午後6時半～8時半

場所NEC三田ハウス芝クラブ

議事 会長挨拶、会員紹介・挨拶、活動報告。

出席者35名

*遠隔地参加者(ボストン):

増淵興一夫妻、吉野耕一夫妻。

*会員紹介: 小林規威氏、中本正幸氏。

日本ボストン会2005年度総会は、近藤宣之副会長の司会で定刻に開会いたしました。

冒頭、佐々木浩二会長から活動状況を回顧し、会員は余り増えないが、ボストン日本協会の100周年記念として輪島漆器をお届けしたところ、ピーター・グリーン理事長からお礼状が届けられたことが報告されました。今後はハーバード、MITのグループとの交流を図り、次期会長の選任を進めたいとのご挨拶をいただきました。

ついで乾杯は井口武夫顧問にお願いしました。当会の発足10年余を経て、今日は遠路、増淵・吉野両先生夫妻がご参加をいただき、今後は新会員の参加を求めながら、ますます友情を深めて行きたいとのご挨拶をいただき、乾杯の音頭をとっていただき、恒例の懇親の集いに移りました。

お食事もお大分進み、懇親の雰囲気盛り上がったところで、遠路ご参加頂いた方からご挨拶をいただきました。

増淵興一先生からは25人の生徒で始めた日本語学校が今年30周年を迎え、今は生徒が680人に増えていることが報告されました。また今年は戦後60年の節目にあたるが、ご自身は61年前に学徒動員で溶接を経験したことが今に繋がり、溶接学で日本が経験したことが、今、外国でその失敗の経験が求められていることが報告されました。

吉野耕一顧問からは、今年日ロ戦争後の100年祭がアメリカで開催されて、参加して来たことが報告されました。

吉野夫人からは現在の婦人部でズンドコ体操を取り入れているなどの活動状況をお知らせをいただき、来年3月には第3回目の里帰りの旅行を計画していることが報告されました。

小林規威先生は戦後の1951年に18歳でボストンに留学、第2の故郷で、ボストン日本協会のオールデン氏やハーバード・ビジネス・スクールの友人にはお世話になったことが報告されました。

藤崎博也顧問は現在音声学を研究、昨年インドに行き、現在は死語となったサンスクリット語を研究し、インドで話されている複数の言語の共通語としてそのアルゴリズムが翻訳に使えないか研究しているとお話をお聞かせいただきました。96歳で研究を続ける元気な先輩に見習って、あと21年は頑張りたいと語っておられました。

茂木賢三郎顧問からは今年は終戦60年にあたり、日本のポツダム宣言受諾にあたり、多くの条件が付記され、武器解除だけが無条件であったにもかかわらず、広く無条件降伏として世間に受け止められていることを指摘され、近年、多くの間違いが正されていないので、国策に間違いのない外交を外務省にお願いしたいとお考えをお聞かせ頂きました。

中本正幸先生からは今、日本はディスプレイでは韓国サムソンに追い上げられているが、相手は国策に基づく研究費の投入があり、日本の研究費は非常に制約されている。台湾も追い上げてきている。その中で若い研究者に頑張っていて欲しいと願っているとお話を伺いました。

この後、総会の議事に移り、藤盛紀明副会長から今年ご提案する会則案改定は、現在の慣行を文書化したもので、今年の総会で承認頂ければ、1年間準用した上で、来年の総会で正式な会則として決定したいとの趣旨説明をいただき、出席者のご承認をいただきました。

会計報告は棚橋幹事から第13年度の決算報告を受けて、出席者のご承認をいただきました。

収入¥441,315 支出¥402,441 収支差¥38,874

資産¥1,370,454 負債¥2,502 正味財産¥1,367,952

又、会計幹事は新年度から山崎規矩子氏にお願いすることが報告されました。

この後、同好会の報告をいただきました。

*ハイキング部(土居陽夫氏)

*ゴルフの会(近藤宣之氏)

*美術の会(酒井一郎氏、酒井典子氏)

*音楽の会(関夫妻)

*歴史を飲もう会(篠崎史朗氏)

*「ボストンへようこそ」頒布(近藤百合子氏)

*ホームページ(佐藤文則氏)

*「ボストン日本人学生会の記録」(三好彰氏)

閉会の前にボストンからご参加の増淵先生から、留学生の記録で戦争前後の情報が欠けているので、ボストン・日本両サイドでの調査研究が必要ではないかとのご提案をいただきました。

総会の最後は、恒例に従い、藤盛副会長の「一本締め」のご発声で全員一拍手で閉会。(俣野善彦)